

「**真実の宗教**」(十一)

—— 私にとって報恩とは ——

櫟 暁 講 述

法話

ただいま御紹介にあずかりました鹿児島教区法泉寺の前住職の襟暁でございます。今年まで十三回この報恩講の法話を担当させていただいております。本年は今皆様方のお手元にあります資料を使ってお話し申し上げたいと思っております。聖典を持参していらつしやらない方もおありだとお聞きしましたので、本年はこの勤行本の中に出ている宗祖親鸞聖人のお言葉をよりどころにして法話をさせていただきたいと思えます。

まず始めこの赤本の八二頁を開けていただきます。資料には勤行集八三頁の四行目の「ああ、弘誓の強縁」というところです。ここから一緒に読んでみたいと思えます。

① 教行信証総序（『聖典』一四九頁十二行目）（勤行集八三頁四行目）

資料

ああ、弘誓の強縁、多生にも値いがたく、真実の浄信、億劫にも獲がたし。たまたま行信を

獲^えば、遠く宿縁^{しゆくえん}を慶^{うらや}べ。もしまたこのたび疑網^{ぎもつ}に覆蔽^{ふくへい}せられれば、かえってまた曠劫^{くわうけつ}を徑歴^{けいれき}せん。誠なるかなや、撰取^{せんしゆ}不捨^{ふしゃ}の真言^{しんごん}、超世^{ちやうせ}希有^{せきゆう}の正法^{しやうぽう}、聞思^{もんし}して遅慮^{ちりよ}することなかれ。ここに愚^ぐ禿^{とく}釈^{しやく}の親鸞^{しんらん}、慶^{うらや}ばしいかな、西蕃^{せいばん}・月支^{がつし}の聖典^{しやうてん}、東夏^{とうか}・日域^{じちいき}の師釈^{ししやく}、遇^あいがたくして今^{いま}遇^あうことを得たり。聞^ききがたくしてすでに聞^きくことを得たり。真宗^{しんそう}の教行証^{きやうぎやうしやう}を敬信^{けいしん}して、特^{こと}に如来^{にらい}の恩^{おん}徳^{とく}の深^{こほ}きことを知りぬ。聞^きくところを慶^{うらや}び、獲^うることを嘆^{なげ}ずるなりと。

② 正信偈（『聖典』一〇五頁十五行目）（勤行集十七頁）

弥陀^{みだ}仏^{ぶつ}の本願^{ほんがん}を憶念^{おくねん}すれば、自然^{じぜん}に即^{すなは}の時^{とき}、必定^{びじやう}に入る。ただよく常に如来^{にらい}の号^{ごう}を称^なして、大悲^{だいひ}弘誓^{くわうせい}の恩^{おん}を報^うずべし、といえり。

③ 正像末和讃（『聖典』五〇三頁 中三十三）（勤行集一一五頁）

釈迦^{しやくか}・弥陀^{みだ}の慈悲^{じひ}よりぞ 願作^{がんさく}仏心^{ぶつしん}はえしめたる 信心^{しんしん}の智慧^{しちゑ}にいりてこそ 仏恩^{ぶつおん}報^うずる身^みとは

なれ

この後のところですね。「特に如来の恩徳の深きことを知りぬ。」という、親鸞聖人ご自身が報恩のお気持ちで一生涯闡法を貫かれて、その中で浄土真宗の教相、教えの筋道を明らかにする立教開宗の根本聖典『教行信証』を御著作になったわけです。

皆様（『真実の宗教』（十））はお持ちでしょう。昨年お話した筆記録の三頁の です。「親鸞聖人の立教開宗」、立教開宗と申しますのは、浄土真宗という教えの筋道を立てて、一宗を開かれるということ。親鸞聖人は、「私は法然上人の弟子であります。したがって法然上人にそむいて浄土宗の他に浄土真宗を立てるという意図は全くありません。私が浄土真宗と申すのは法然上人の開かれた「浄土宗の真の旨」であり、それを明らかにするのであります。こういう立場で立教開宗をなされたわけです。立教開宗と言いますと我が国で天台宗、真言宗、また曹洞宗、日蓮宗等々次から次へと仏教の諸宗が出来てくる。その祖師方が中心になってそれぞれ弟子を養成される。そこには、この一宗を開いた意義とその教えの筋道を明らかにした根本聖典があるわけです。それは諸祖師の著作です。ところが浄土真宗の場合は法然上人に反対して親鸞聖人が『教行信証』をおつくりになったわけではなく、「法然上人の教えの中心はここにある。法然上人が言おうとして言えなかったことを私が明らかにする」という御意図で『教行信証』をおつくり

なりました。

皆さん『歎異抄』をお読みになつておられると思いますが、「親鸞は弟子一人も持たず」と言われています。(第六章^『聖典』六二八頁v)。「親鸞は弟子一人も持たず」とは弟子が一人もいないというわけではありません。そういった表面的なことではありません。親鸞聖人を師匠と仰いでいる弟子は沢山います。有名な人は二十四人おり、その下にその人たちを師と仰ぐ人々、つまり親鸞聖人の孫弟子も沢山います。「弟子一人も持たず」とはそう言った表面的な意味で弟子がないといったことではなく、「私は師匠の立場でものを言ったり人を指導したりするわけではありません。私は法然上人の弟子であり、私にとりもなう人々を南無阿彌陀仏を深く信じ称える同じ友達(御同朋御同行)として信じあい、法然上人の教えを一生涯仰いでいくのであります」と、法然上人の弟子の立場を一生涯堅持されたのです。こういう方は他にいらっしやらない。聖道門の祖師という方は伝教大師でも弘法大師、道元禅師、日蓮上人でも皆寺をつくって弟子を養成するということに専念されました。ところが親鸞聖人は「親鸞は弟子一人も持たず」「御縁のある全ての人々は、本願の御法を聞いて、ただ念仏一つで往生成仏できる。苦惱を乗り越えて生きることができる。そして究極の世界、徹底した正覚しやうかくの世界に到達させていただける御同朋である。決して親鸞の弟子ではない。我々凡夫が共に魔界・外道を出て涅槃界に到達できるのは、ひとえに法然上人の教えのおかげなのです」という立場です。ただ時代の問題があつて、法然上人

は平安朝の末、鎌倉の始まる前、つまり過度的な方ですから、やはり時代の影響があつて『観無量寿経』の教えを完全に脱却することができなかった。命が終わる時に仏様のお迎えがあつて浄土に往生させていただくのだという『観無量寿経』の教えから完全に脱却できなかった。ところが親鸞聖人は、法然上人の真意は臨終来迎にはなく、現にたすかつていくという、現に信の一念に浄土に往生する教えである。「現生不退」。つまり現に行き詰らない絶対自由、絶対平等、絶対平和の世界を生きられる人間になるということをお示しになったのだと法然上人の真意を領解された。それは皆様ご存知のように『末燈鈔』という親鸞聖人のお手紙を編集した書物の中にあります。

『末燈鈔』の第一通(『聖典』六〇〇頁)を見れば「撰取不捨のゆえに、正定聚のくらしいに住す。臨終まつことなし、来迎たのむことなし」。これが現生不退を最もはつきり示されたところだ。 「撰取不捨のゆえに、正定聚のくらしいに住す。臨終まつことなし、来迎たのむことなし」。息の止まる直前にお迎えがあると説く『観無量寿経』は方便の教えであつて、我々は信心を得た時に現に救われる。これが『大無量寿経』の真実の教えである。清沢満之先生のお言葉で言えば、「われは実にこの念によりて現に救済されつつあるを感ず」。清沢先生の『他力の救済』の中の言葉です。『他力の救済』は清沢満之先生の亡くなる二ヶ月前に書かれた文章です。「嗚呼、他力救済の念はよく我をして迷倒苦悶の娑婆を脱して、悟達安樂の浄土に入らしむるが如し。我は

実にこの念によりて、現に救済されつつあるを感ず」。今、救われつつあるのだ。死ぬ時まで待たねばならぬというのではないとおっしゃったのです。なぜかというと、仏の光明によって私の悩みの元が我執と煩惱であるということ、つまり、宿業の我が身という、この我が身は身体がある限り煩惱と執着から離れられぬ宿業の我が身だということを徹底して知らせていただいて、仏の大きな本願の用き（はたは）、つまり摂取の光明によって救われて行く。そして、自分自身を知ることによって今まで碍（さむ）りになっていたことが碍（さむ）りにならない、死を怖れる心すらも超えきるといふ世界（無碍の一道）を感得させていただく。我が身の上にといただく。単に理解するといふのではないのです。毎日の生活の上でありありと会得させていただく。そういう生き方ができるというのが「摂取不捨のゆえに正定聚に住す」ということであり、現在の救いです。もっと別な方向から言ったら人間の立てた善悪にとらわれない世界。「歎異抄」の第一条で言うのなら「本願を信ぜんには、他の善も要にはあらず。念仏にまざるべき善なきゆえに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえに」（『聖典』六二六頁）と言うお言葉が、現に救われつつある具体的信境（正定聚の信境）であると私は師匠曾我量深先生から教えていただきました。私は二十三歳のときに曾我先生に遇わせていただいてから約六十年、曾我量深先生の教えをただ一筋に聞かせていただいで来ております。「歎異抄」のこのところが正定聚の信境だと言われた方は他にはいらっしやいません。まねして云っている人はいますが始めて言われたのは曾我先生で

す。

この「本願を信ぜんには、他の善も要にはあらず。念仏にまさるべき善なきゆえに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえに」これが正定聚の信境です。つまり自分の善悪のとらわれから完全に解放される。真の自由の生活ができる。我々の善悪は自分に都合の良いことを良いという。自分に都合の悪いことを悪という。大体そうなのです。それで平素どういふ暮らしをして居るかと言うと人の批判をしているわけです。あの人は善人だとか、あの人は顔はにこやかにしているが腹は黒いだとか。悪人だとか言うような、そう言う他人の批判ばかりして、自分自身は全く分からない暮らしをしているのです。自分の顔は自分では見えませんが。鏡を見なければ自分の顔に墨が付いていたって分からない。穏やかな顔は鏡で見たところがある。ところが腹立てたり、ものすごく悲しんだり絶望している時の顔は見たことがないのです。そんな時には鏡の前に座ろうという気が起こらないからです。姿だけでもそうなのだから我が身全体がどういふものなのかは教えの鏡に照らされなければ分からない。何時も他人の批判をして自分に都合の良い人は善人だ、都合の悪い人は悪人だ。あるいは物についてもよい物・悪い物と自分の都合で判断して暮らししている。このような人間の立てた善悪の世界には救いはないのです。何時までたっても他人の批判はするが我が身は分からないで不満・不安の暮らしを続けてゆくのです。

仏教の言葉で「生死」という言葉がありますが、生きる死ぬと書きます。「セイシ」と読む場合と「シヨウジ」と読む場合があります。仏教で「シヨウジ」と読んだ場合は具体的には長い迷いの生活のくりかえしということであり、現に日夜の不安と不満の生活のことです。「生死いずべき道を聞く」という言葉がありますが、「生死いずべき道を聞く」とは仏法を我が身のこととして聞くことです。これは深い意味で我々の根元的な迷いから解放されるということなのですが、具体的に言ったら自分の上起きてくるあらゆる事、不安であったり不満であったりすることから完全に解放されることです。具体的に不安と不満から解放される世界を会得させていただくということが生死を超えるということ。それは善悪の世界ではできないことです。いつも不安、いつも不満。それで結果どうということになるかということと数を頼みにするのです。自分の立てた善悪の論理を承認してくれる人が多ければそれは良い。それを承認してくれる人が少なければそれはいけないと、数を頼りにして自分を正当化しなくてはならないことになるのです。

もう一つは我々には三つの問題があります。それは劣等感と被害者意識と利己主義です。口には出さないけれど皆な劣等感を持っている。劣等感を持っているということは他人と比較して自分を価値付けして、自分より劣っていると思う人に対しては優越感を持ち、自分より優れた人に対して劣等感を懐く。そういう比較的価値観で自己を立てようとするのです。その根源は劣等感です。それでは不安です。それから被害者意識です。自分は存外そんがい他に加害しているのですが、言

葉や行動で加害したり、身振りそぶりで加害しているが、それは忘れて被害者意識だけが突出しているのです。自分はこの人のためにひどい目にあつたとか、この人に煮え湯を飲まされたとか。そういう所でいつも他人を恨んだり他人を憎んだりする心から解き放たれない。それからもう一つは利己主義です。これは説明する必要はないでしょう。皆自分を中心にしてものを考えているのです。自分の都合の良いようにと考えているのです。

だけれども世の中そのような自分の思いだけではうまくいかないのです、まあまあ妥協していかなくてはいけないと考えいつも妥協を繰り返す生き方をしています。また妥協したことにおいて新しい問題がおきてくるから、さらに妥協しなくてはならない。そういう生活を繰り返して終しまいで死んでしまう。このような一生なら、全く救いがないのです。そして最後に運命というところに落ちるので、落とし穴は決まっています。自分は運が悪かった。こんな親の子として生まれた。こんな配偶者に辛抱して生きてきた。こんな子供しか得られなかったというような何時も自分の身内に対しても不満を持って最後は運命的なことに落ち込んで死んでしまう。それが人間の迷いの一生です。それを超えるということが生死を超えるということです。そういう生活から完全に解放される。それが往生ということ。つまり不純粋な世界から純粋な仏の立てられた世界（浄土）に往き生まれる。往生とは死ぬことではありません。困ることもありません。ところが世上じやうせ変な誤解が生じている。往生とは死ぬことだ、困ることだという誤解です。『大往生』

という題の本がありますが、往生に大小があるわけではありません。それは長生きして楽に亡くなったのを大往生とか俗に言っているだけです。往生とは死ぬことだという通俗的理解は全く変わっていません。そういう「往生」の誤解が多い、列車の立ち往生、北陸線が大雪で駅と駅の間で列車が止まってしまつて前進も後退もできない状態を「立ち往生」といいます。往生についてそんな誤解が生じていることは我々の責任なのです。

それは親鸞聖人の教えを聞いて本当に深いお恵みをいただいて往生という行き詰らない精神生活を会得させていただいたというその喜びが欠けているから、世間にそういう誤解を招いたのだと思います。往生という精神生活つまり光明の世界を親鸞聖人は一生涯我々に教えお示くだされたのです。それは人に教えるために言われたのではない。御自分がその精神生活を教えによつていよいよ深くさせていただくということが中心で、一生涯弟子を持たない。私は法然上人の弟子であつて、弟子を養成するための寺をつくらないという徹底した求道者で一生を終わられたのです。その親鸞聖人のお恵みを深く感じて我々は報恩講をお勤めするのです。それが分からないと報恩講をお勤めする意味がないのです。

もう一つの問題は報恩講の習俗化ということですが、習俗化とは去年も勤めたから今年も勤めねばならないというように考えて勤める。それは良い面もあります。去年も勤めたから今年も勤めねばならないということですが、報恩講が続いてきたという良い面もあるが、報恩講を勤める意

義がはつきりしないままにただ盛大に儀式をすればそれでいいという考えに留まってしまっている場合が多い。そういう問題を持っているから、蓮如上人が『御俗姓』などをつくって報恩講の精神を明らかに示されたことは今まで何回もお話申し上げています。

仏教の上で「恩」ということは色々な形で説かれています。「恩」は恵みということですが、『心地観経』に四恩ということが説かれています。それは父母の恩、国王の恩、衆生の恩、三宝の恩とこの四つです。両親に育てられ、徳の高い王様の統治する国に育った。多くの人の努力によって色々なものが生産、流通されたり、人生経験を教えられたりして生きていけるようになる。この三つのお恵みは相対的なものです。絶対的の恩とは最後の三宝の恩です。三宝とは仏、法、僧です。仏の恩。仏の覚られた道理を法という。法をたてるのは仏教だけの独特のもです。それから僧というのはサンガということで信仰共同体です。共同して信心を求めていく共同体をサンガといいます。その三宝の恩を四恩の最後に強調しているのが『心地観経』です。これは聖道門、浄土門のどちらにも通用する仏教一般の教えです。

ところが真宗独特の「恩」は、願恩と教恩ということですが。阿弥陀如来の本願のお恵み、それから本願の意義を説かれた釈尊を始めとする沢山の菩薩、高僧方や先輩方の教えの恩です。願恩と教恩を我が身の上に受けているか、信受しているか、この恩を知る生活が出来ているかどうか、がまず問題です。去年の筆記録を見ていただきますと感恩ということを書いたところがあります。

二四頁五行目です。まず感恩ということがある。恩を感じる。その感恩ということがなくて報恩ということはありません。

譬えて申しますと、この頃は北朝鮮から（これは去年のことですので）二十四年ぶりにお帰りになった方々は羽田に着かれた時に、「皆さん、大変ご心配をおかけしましたがお陰様で帰らせていただきました」と挨拶された。私はそれを聞いて、こちらが「大変でございましたよ、二十四年間もご心配が多かったですよ、ようこそお帰りになりました」と申し上げなければならぬのに、帰ってこられた方々のほうが先に「大変ご心配をおかけしました。ありがとうございます」と言われた。私はこれには胸が痛かったです。本当、いろいろご苦労されたから、ああいう言葉が出てくるのじゃないですか。

感恩とは自分が逆境にいると思っても、その思いが転じてお恵みがあったから現在の状況にさせていただいたのだと深く感じることです。ところが我々が日常他の人にお礼を言うのは単なる社交的儀礼として、腹ではお礼を言う気持ちがあるにないのに礼儀上言っておかなくてはならないということが普通になっています。

報恩ということは上記のような儀礼的分別とは違う。自分自身が本願とその教えがなければ、自分が生きている意味がほとんど分からなくなってしまう。願恩と教恩のおかげでこの世に人間として生まれ、目覚めて生きていけるようになった、現に覚めて生かしていただいている、それ

を長い間気づかずにきました。ありがとうございました。こういう自覚内容です。それでは表現が不十分ですが、そうしか言えない深い信境をもって、本願と教えのお恵みとを深くいただいているのが報恩であると私は思います。

願恩と教恩とは阿弥陀如来の本願のご恩とその本願の意義を何千年という間伝承して教えてくださった教えの御恩です。それは法蔵菩薩から始まって親鸞聖人までの歴史もあるし、それ以後の歴史もあるが、親鸞聖人が立教開宗してくださらなかったならば私たちはこの尊い教えに到底遇えなかった。遇えないと救われない。この世に言葉の分かる人間として生まれた無比の尊いことを無駄にしてしまうような私であったが、お陰様でこの聖人の尊い教えに遇わせていただくことができました。こう喜ばしていただくところから報恩講という法会が伝統されているのです。信心の歓びがない人には報恩講の意味がはつきりしないのです。まあお寺で毎年一回開催される親鸞聖人のお祭りだろうというようなことになってしまふのです。

日本人は祭りが好きで、東京にも沢山の祭りがあります。三社祭をはじめとして私が住んでいた練馬にも氷川神社のお祭りなどがあります。何を目的にお祭りをするのか。たぶん御神輿を担いでストレスを解消するのでしょう。あるいは祭りに人を寄せて商売する、つまり営業上の目的で祭りをするということが一般化しているようです。そういう状態ばかりを見ているので、報恩講も親鸞聖人の、年に一度のお祭りぐらいに思っている人も沢山います。決してそんなものでは

ありません。

我々は願恩と教恩を感じることににおいてはじめて報恩講をお勤めしなくてはならないことが分かるし、報恩講の慣わしをつけてくださった先輩念仏者のご恩ということも分かるのです。そのところをはつきりしないで、我々が昨年の通り今年も報恩講をつとめるだけなら習俗的な行事になってしまふ。決して習俗で勤めるのではないのです。

資料の　ここに愚禿釈の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、とは今の地名で言ったのならインドとかパキスタンとかアフガニスタンです。インド、パキスタン、アフガニスタンの人々が本願を讃嘆せられ、本願をほめ讃えられた書物を書いてくださった。それから　東夏・日域の師釈　東夏とは中国のことです。日域とは日本のことです。中国、日本の師匠の方々が本願の意義を述べられた注釈書に遇い難くして今遇うことができた。普通の学問的意識だけでは三国の祖師方の書かれた浄土教の書物を読む気が起こらないかもしれない。しかし私はおかげで法然上人によつて、こういう昔の異民族の中に熱心な教学者がたくさんおられる、これらの先輩方のご指導をいただかねばならないということをお教えていただいた。

遇いがたくして今遇うことを得たり。「難」とは出来ないということではないのです。到底できないはずの事がおかげで出来るようになったということが「難」です。「難儀やなあ」ということとは違います。関東では関西弁は通じないかも知れませんが、「しんどいなあ」とか「難

儀やなあ」と大阪、京都の人は言う。これをして下さいませんかと依頼すると、「そりゃ、しんどいなあ」という。これは出来ないということ。頭からそんなことは出来ませんと拒否はしないが、とても私には出来ませんとやんわりと断る言葉が「しんどいなあ、難儀やなあ」ということです。関東ではどう申しますか。関東の人はあっさりとしていますから「できません。」とぱつと言いますか。「とても私には無理でございます」と、上品に言えばこういうことでしょう。そういう常識的な「難」とは違います。出来ないはずの事が出来るようになったということが「難」です。

難信と獲信が一枚なのです。信を獲ると言うことは我々の常識世界では出来ないことなのです。ところが師匠の教えによって出来るようになったということが「難」なのです。遇いがたくして今遇うことを得たり。つまり偶然ということがあるが、あえて説明すれば必然なのだけれど偶然なのだということです。道理から言えば必然である。必ず遇わなくてはいけないようにしていただいたのですが、私の常識から言ったら偶然である。遇いがたくして今遇うことを得たり。とはそういうことです。

その世界が分かったならば、七百年も八百年も昔にお亡くなりになった親鸞聖人や法然上人のお恵みを深く感じて報恩講をお勤めして、我々が親鸞聖人・法然上人と同じ信心を得させていただかねばならないというはつきりとした方向がでてくるのです。

世の中のことは名、利、愛欲、勝他、長寿の五つで動いているのです。名をあげる。金儲けをする。愛情を満たす。人に負けられないと頑張る。最後は負けてもよいから長生きすること。この世はこれで動いているのです。

鹿児島には百十四歳のおばあさんが居ました。寝たきり老人ですが非常に楽天的な方で孫が歌うと寝床で手だけで踊るといってお婆さんです。県知事がお祝いに来たけれど、現実はどうかといったらだんだんかなわぬところが増えてきてどうしようもない状態だったそうです。だけでも長生きすることが幸せだということになっていくのです。

私も八十まで生かしていただきましたが、長生きしたから幸せだと言うことではありません。視力も衰えてくるし、耳も聞こえないし、膝が悪くなって足が曲がらない。物覚えが悪くなる、物忘れがひどくなるなどです。年寄りには。脳の中に空洞が出来るそうで、私は検査してないからどのくらい空洞が出来ているか分かりませんが、若いときにおぼえたことは存外おぼえているが、四十過ぎて勉強したことはすぐ忘れてしまうのです。このごろ黒板に字を書こうとしても忘れて書けず恥をかくことがあります。字を書こうとして恥をかく。それが老化現象でしょう。

お医者者に行つて「私は荷物を持って早足で歩くと胸が苦しくなるのですけれどどこが悪いのでしょうか」といって心電図をとってもらったがどこも悪くない。血液検査をしたら少し赤血球が足りない。それで鉄剤を飲んでいきます。あまりはかばかしく快復しなくて、時々苦しくなるがど

こが悪いのかとお医者に尋ねたら「それはお歳のせいです」とのこと。現実はそのとおりです。薬が効かないのです。

そういう苦しみに耐えて生きていけないといけないうことになりますと、「老」という事は単なる長生きではなくて「老苦」になります。生苦、病苦、老苦、死苦は我々自身固有の逃れられぬ四つの苦しみだと釈迦如来は教えられています。ところがそのとおりですとなかなか頭が下がりません。そういう私なのです。つまりこの因は自身に本来にあるのだが、そう受け止めない。つまり生理的原因で苦しんでいるのだと思うだけで、意識的なとらわれの問題だとは思われない。それで老人になるとだんだんひねくれてきます。この私が本願によってひねくれないようにさせてもらうのです。浄土真宗の教えは、ひねくれるはずの人間がひねくれなくてすむ、そういう世界を得させてもらうのです。

親鸞聖人も老苦は感じていられたに違いない。お手紙に目も見えないようになった、なにこともみな忘れてしまったと書いておられます(『聖典』末燈鈔(八)『六〇五頁三行目』)。自分の子をよくよく頼むと書いたお手紙も残っております(『聖典』消息拾遺(六)『六一三頁十一行目』)。これらを見れば聖人も老苦を感じておられたに違いない。けれどもただの老苦ではない。老苦を縁にして本願の救済をいよいよ深く感じて生きられた。生老病死の四苦を受けて立つだけの精神力を早くから他力の信心として涵養かんようしておられるから、それができたのである。そういう精神界

を生きておられたから、九十で亡くなるまであらゆることを縁にして、成仏道を前向きに歩んでこられたのです。その聖人のおかげで私たちは今この浄土真宗というお御法（みのり）に遇わせていただくことができるのです。これが 遇いがたくして今遇うことを得たり だと私は思っております。

（休憩）

資料（本書二頁）に『正信偈』の一部分がでております。皆様は『正信偈』のお勤めをしておられるでしょうから、上手におできになるでしょうが、『正信偈』の内容はなかなか難解です。とにかく阿弥陀如来の本願と釈尊の教えから七高僧の教えまでを百二十行八百四十字で非常に簡略して書かれています。また偈文という中国風の宗教歌としての表現の難しさもあります。偈というのは、ガータと違ってインドから中国に伝わってきているのですけれども、一般の漢詩とは違い、偈は韻がふんでない。だから、一句の最後の一字をどう発音するかというのは全く関係なしに作られているわけです。

今日のところは、勤行集赤本の十七頁です。

「弥陀仏の本願を憶念すれば」は「憶念弥陀仏本願」を仮名まじりの文章にしたものです。弥陀仏の本願を憶念すれば自然に即の時必定に入る。ただよく常に如来の号を称して「号」というのをミナと読みます。お勤めの時は「唯能常称如来号」ですけれども、これを仮名交じりで読んだ場合は「ただよく常に如来の号を称して、大悲弘誓の恩を報ずべし、と言えり」

憶念弥陀仏本願 自然即時入必定 唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩

これは、インドの龍樹菩薩の浄土の教えの結論であります。憶念ということは、心に想い浮かべるといことです。真宗独特の味わいで、我々が南無阿弥陀仏と称えるといことは、単に発音するということではない。念仏申すといことは、その精神生活の内容として本願を心に想い浮かべて浄土を生きるといことを憶念といふ。憶といふのも、念といふのも心に想い浮かべる。弥陀仏の本願を憶念すれば、といふことは 忘れておる時はあるけれども といふことが後に隠れているでしょう。我々は聖者ではなく凡夫（普通の人間）ですから、物欲や怒りに振り回されたり名譽欲にひっかかりたりして阿弥陀如来の本願を忘れていることがあります。

それで、清沢満之先生が、「われ他力の救済を忘るときは、われ物欲の為に迷わされること多し」「われ他力の救済を忘るときは、わが処するところに黒闇覆う」等といふのは、日常忘れる時があるということである。「忘れる」とは我々が凡夫の悲しさで、毎日多忙な仕事をする。多忙といふのは、ひとつは毎日の職業上の多忙も勿論あるが、じつとして多忙なのです。

それは頭に妄念妄想がいつも動いているわけでしょう。麻酔がかかっている時以外は多忙なので、しょっちゅういろんなことを考えています。寝ていても夢を見る。身体は寝ているが心が寝ていない。体は寝ていても心が忙しい。そういう忙しさもある。「本願を憶念すれば」というのは、そういう忙しい生活をしているが、仏の本願力が強いから我々が憶念せざるを得ないようになる。心に思い浮かべざるを得ないようになる。そういうことだと私は思います。弥陀仏の本願を憶念しなければ、浄土真宗の教えと関係がないことになる。全く、生死を超えようという心、迷いを本願によって超えようという心がおこらないと、浄土真宗の教えと関係がなくなる。しかし、関係なしでは生きられない。やはり我々の力では自身の迷いをどうすることも出来ない、苦しみが常時出てくるから、本願を憶念せざるを得ないようになる。その我々に向かって、「何時でも・どこでも・誰でも・どんな心でも称えられる南無阿弥陀仏を忘れないように生きなさい、どうかたすかして下さい」という教えが釈尊の教えです。何時でも・どこでも・誰でも・どんな心でも称えやすい念仏を忘れるな。忘れるなということとは、「忘れたらあなたは救われませんよ」ということです。無理して思い出せというのじゃない。憶念せざるを得ないように何時もなってくる。そういう精神生活を実践すると、自然に即の時必定に入る。

自然にというのは人間のはからいを超えた本願力の自然、自ずからしからしむるとい^{おの}う用^{はた}きによつて即の時とは今すぐということ、即座にということです。間違ひ無く、迷いを転じて名利愛

欲の世界を遙かに離れた世界、浄土を生きるということ。必定というのは無碍の世界が必ず定まる。決定する。仏法を聞かない者は定まらないでふらふらしている。人は金だということでああそうだなと思う。人が健康だと言うとああそうだな金があっても健康でないといけないと思う。人が家庭の平和だと言うとああそうだなあ家族が和合してなければ、金があっても健康であつても面白くないなど、他人が言ったことにいつもふらふら動かされて、時計の振り子みたいな生活を続けて一生終わってしまう。これでは必定でないのです。念仏申すとは、成仏という世界を会得するという究極の目標を持って自分は浄土を生きているのだということが領けることです。これが必定です。手段と目的と分けるのじゃなくて、私は仏の純粹な世界、純粹光明の世界（浄土）を生きようとしている。そして、浄土において成仏する。成仏とは仏法の上での人間完成ということである。人間完成ということは自分だけの救いに止まってしまうのではなく、又縁のある他の人を救っていく、そういう用きに帰入させていただく身になる。それが即の時、即というのはその場でという、臨終待つことなく、来迎たのむことなく、その場で救われる。ただし救いが又単なる個人的な救いではなくして、信仰共同体の一員としての自分が救われていく。そこに師友との御恩、師と友の御恩を感じると同時に、又信心のはつきりしない人に信心をはつきりしてくださいとはたらきかける。そういう自他相応した精神生活が自然にできる。頑張るんじゃないのです。世の中のことは何でも頑張るといいますが、我々仏法者は自然に必定に入る。頑張るんじゃない

ない。

テレビのスポーツニュースで松井とかイチロウとか出てくる。日本からわざわざアメリカに行ってホームラン打ったの、ヒットを放ったのというようなニュースがいっぱい出てくる。「頑張ってチームが優勝するようにします」と言う。大体いうことが決まっている。人間みなそうです。会社のために「頑張って」、家族のために「頑張って」が普通です。頑張れる間は頑張れるけれど、いつかは頑張れないようになる。頑張ろうとしても頑張れないことが出てくる、その時行き詰まる。

二、三日前だったかテレビで、ある会社の社長が一億何千万の負債があって、返済する道がないので生命保険に入って、インターネットで「なんでもします」という男に頼んで自分を殺させようとした。というニュースが入ってきました。頼まれた男も、殺してくれというのをまともに受けて刃物でやったら、殺せずに大怪我をさせた。それで二人とも逮捕されたというニュースが入ってきた。私はそれを見てギョツとした。人間は金のために生きているのじゃない。しかし、金の苦勞をすると命まで賭けて金を求めるということも事実です。又殺しを頼まれた人も金のためにやった。そういうことが今、日常化しているでしょう。情けないことだと思うが、利益共同体社会だからこんなことになる。ドイツ語で言うとゲゼルシャフト、ゲマインシャフト〔Gemeinschaft〕（運命共同体）に対してゲゼルシャフト〔Gesellschaft〕というのは利益共同体、現代人はいやお

うなしにそこで生活している。借金ができればどんなにしてもそれを返さなければならぬということまで賭ける。日本全体がそういう方向に進んでおる。そういう時代に我々はどう生きるか。我々そんなところに落ち込んでしまったら、政府の権力で造った印刷物のために命を捨てることになる。

安田理深先生が、本をたくさん買ってこられた。奥さんが「この本、家に前からあります。同じものをなぜ買ってくるのですか」と言ったら、先生が「お前の財布の中にも同じものがたくさん入ってるだろう」と言われたという逸話がある。政府が権力で印刷した紙幣のために命を捨てることになるのは悲しいことです。それから、私は不思議に思うのは円高、円高という。貨幣は物を売り買いするために作られたものだけれど、それが又売り買いの対象になっている。どうして貨幣が売り買いの対象、商品になっているのか、今円高で困っている。貿易で、売る方は外国で商品が高くなって売りにくい、要するに金のために人生が振り回されている状態。浄土真宗は本願力によって行き詰まらない道が開けてくる、借金があっても行き詰まらない、そういう世界を会得することが大事なのです。それは何によってできるか、本願念仏によってできる。本願を忘れると振り回されるのです。自分の妄念妄想に振り回されて、どうしようもなくなる。

その後の、「ただよく常に如来の号 ミナ を称して」というのは、常にということは、いつもということです。そこに、常に念仏申せるようになるにはどうしたらよいかという問題がある

わけです。忘れるような我が身が常に念仏申せるようになるにはどうしたらよいか。どんなに心が動いても、動いたことが縁になって念仏が称えられるようにどうしたらなるか、という大きな問題があるのです。そんなことは私に関係ないという人は、これは縁がないわけです。少なくとも浄土真宗の教えを少しでも聞こうという人にとっては、常に如来の号 ミナ を称するということは、一人一人の究極の世界だと感じています。みんなそれぞれ一人一人で自分自身の救済ということを中心に念仏をしなさいとお釈迦さまは教えられて、それがやがてはまた他人のためになる。念仏を忘れないということは、やはり聴聞しないと、忘れてはいけないという心があらわになってこないのです。煩惱を刺激するものが多い世の中ですから。

一例を挙げれば、この頃はいろんな放送があり、NHKのテレビだけでも総合と教育の二つの外に、衛星第一、第二とか、ハイビジョンとかデジタル放送とかいろんな種類がある。時にそれにひっかかって皆みたいと思う気もするが、よく考えてみたら、どれだけ良い機械を買っても一つしか見られないのです。二つテレビを並べて見ることはできませんが、どっちかに専注しなければ見た意味がないでしょう。放送する側は視聴者の選択の自由を尊重すると云うでしょう。一つしか観られないのに、放送が多種あることは仏法からいうと、妄念をいよいよ活発に起こさせるということです。私は、NHKを悪意で批判するわけではないが、文化や技術が進むと、放送一つだけ考えてみても、このこと一つと選択が出来ない意識多様化状態、あれもしたい、これもし

たい、そんな生き方になる。そんな生き方をしようとしている中で、ただよく常に如来の号 ミ
ナ を称して大悲弘誓の恩を報ずべし。ここに私が念仏させていたでいて、凡夫唯一の出世間道
である往生成仏の道を歩ませていただけるのは、大きな本願の御恩であつたと、何時もそこに我々
が究極の帰依所を見出させていたたくということでございます。その意味での報恩講です。報恩
講を年一回勤めればいいというようなことではないのです。報恩講を勤めたことにおいて日夜報
恩の心でお念仏申すことができる、本願を憶念することができるような人間に仕立てていただく
ということですよ。

あとがき

本書は平成十五年十月十九日、第十三回報恩講における機暁先生のご法話の記録です。

浄土真宗は報恩講教団と称され、報恩講を勤めることで、一年の終わりを感じ、同時に新たな一年を歩むことを思います。それは、年末年始のような感覚であります。ただし、ただ単に時が過ぎたという年越しではなく、報恩講を勤めることで一年の聞法生活を振り返ると同時に更なる聞法の出発を思わざる得ないのです。

宗祖親鸞聖人のご恩徳を偲び、聖人が出遇った本願念仏の世界に私達も出遇わせて頂いたことを喜ぶ報恩講が当光照寺の毎年の御仏事として、あらためて申すこともなく定着してきたことは、懺先生のご教導のお蔭と感謝しております。また、毎年ご参詣下さる御同朋の方々は、今生かさねてある大きな恵みに報謝せぬおれないという深い仏恩を感じている一人一人であることを拝することです。報恩講を毎年勤められるということは大変なことであります。当寺としては毎年初事の如き勤めていることではありませんが、願恩と教恩の恵みを信受して、報恩行を勤める覚悟がさらに問われてきます。

先生は本書の最後に、「往生成仏の道を歩ませていただけるのは、大きな本願の御恩であつたと、

何時もそこに我々が究極の帰依処を見出させていただく」とお話されておられます。帰依処がはっきりしないということは虚しいことです。はっきりとした帰依処を見出すべく聞法精進し、法座に歩ましめる用きを一層感じ得ていきたいと思えます。

報恩講を勤めるということについて、先生は幾度となくお話されておられ、また、本書でも触れておりますように、習俗化の法要として終わらないように警鐘を鳴らされております。報恩講教団という尊称が身に染みるような歩みを願ひ、法灯を絶やさず今年も勤めて参ります。

先生には毎月当寺の会座でのご教化、並びに報恩講のご出講に深謝致します。また、ご多忙の中、原稿に目を通していただき校正賜りましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

ご法話のテープを原稿に起こして下さいました、護持会役員の淡海雅子様、赤秀品枝様に感謝申し上げます。

合掌

平成十六年十月三十一日

第十四回報恩講にあたり

光照寺 副住職 池田孝三郎

